

融合研究グループの成果の概要

融合研究は、基礎系と実践系心理学の融合を目指して推進された課題である。拠点内公募により採択されたチームの平成18年度の研究成果を簡潔にまとめた。

「共感的対話」における相互作用性に関する多角的研究

—臨床心理学・認知心理学・社会心理学の立場から—

教育学研究科 桑原知子 吉川左紀子 長岡千賀

人間・環境学研究科 渡部 幹

問題及び目的

本研究は、心理臨床面接における共感的対話（以下、臨床対話を記す）の構造を、社会心理学と認知心理学的パラダイムによる実験を用いて明らかにすることを目的としている。

これまでの臨床対話研究は質的なアプローチがほとんどであり、日常会話との厳密な比較や心理療法の学派による差異などについては、熟達したカウンセラーの個人的経験という形でしか知見が提供されてこなかった。そこで本研究では社会心理学的、認知心理学的手法により分析を行い、特に今年度は、臨床対話を二つの観点—(1)臨床対話のマクロ的時系列構造、(2)臨床対話のミクロレベルの情報処理のダイナミクス—から検証し、熟練したカウンセラーが行う臨床対話の構造を実証的に明らかにした。これによって得られた知見は、カウンセラー育成のための有効な指針を提供するばかりでなく、対話という相互行為一般の構造に関する社会心理学的・認知心理学的研究における新たな理論の構築をもたらすと考えられる。

方法および結果

1. 発話テキストの分析

今年度は、前年度に収録された事例をもとに、その発話テキストの分析を行った。とくに、当事者の主観的視点（セラピストとクライアント本人の視点）、および第三者の視点（セラピスト、クライアント以外の観察者の視点）から見たカウンセリング対話の特徴に着目して検討を行なった。第三者の視点は、ケースの「読み」（ケースに対する理解）の質と関係すると考えられる。

2. 臨床対話の構造分析

臨床家と非臨床家との発言の内容や量を比較した。

(1)対話のマクロ的時系列構造

臨床対話はしばしば潜水に喩えられる(図1上)。通常50分/1回の心理面接の中で中盤までに対話内容が深くなり、終端で再び浮上する。ここで深さとは、クライアントによる内省的思考の深まりをも意味する。

今年度の我々の検討では、臨床対話の質によって、発話・沈黙の時間的構造が異なることが示された[1, 2] (図1下)。発話時間・沈黙の時系列的構造は、カウンセラー-クライアントの関係性の質、ならびにクライアントによる内省的思考の深まりの指標となると考えられる。

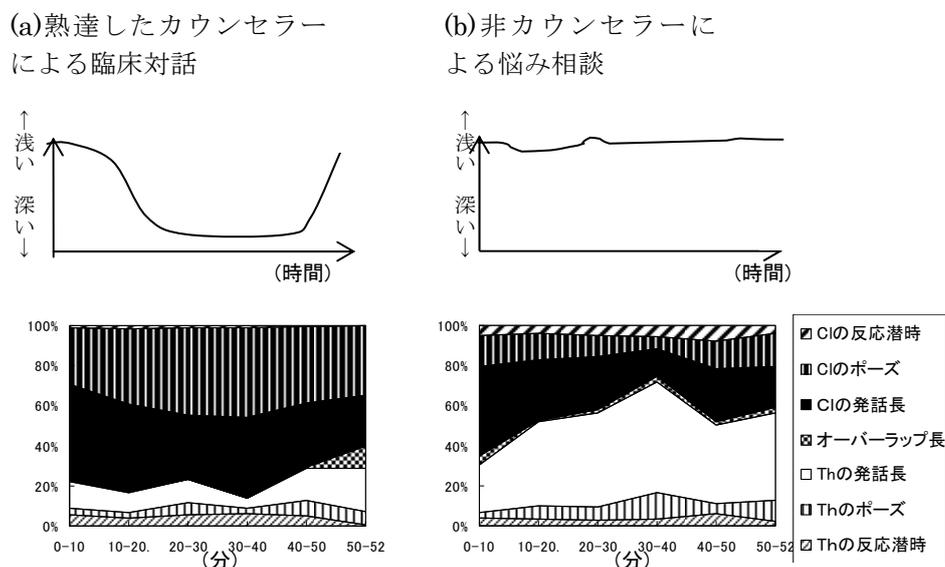


図1 臨床対話の時系列的変化と深まり 横軸は時間(分)。
上は概念的イメージである。

(2)マイクロレベルの情報処理のダイナミクス 一般に、熟達したカウンセラーはクライアントが発する言葉（言語情報）に焦点を置いていると考えられがちであるが、実際には、言葉の背景となる情動や思考を推測する必要があり、そのため沈黙や非言語行動を大きな手がかりとるように見受けられた。また、新たな言語・非言語行動分析アプリケーションの開発によって、心理臨床面接における身体運動を分析し、リカレンスプロットを用いて臨床対話の構造を視覚化することが可能になった[3]。この手法によって、臨床対話における身体同調について、数量的に示すことも試みられた。

考察および今後の展望

以上の結果から、臨床対話では、C1の占有時間、特にポーズ時間が大きな意味を持つ可能性が示された。C1のポーズ時間は、主に自らの内観を深めている状態に生起すると思われる、その意味で、より効果的なカウンセリングを行うための鍵となる指標かもしれない。また、非臨床家との比較研究や第三者による評定によって、身体同調、あるいは、話の「深さ」などに差があることが、数量的に示された。

この研究によって、これまで質的に推測されるしかなかった臨床対話の特質が数量的に明らかにされた。今後は、日常会話の対話構造との比較を行いより詳細な検討を加えるとともに、学派の違いや熟達度の差によって何が変わるのかを明らかにし、また「深さ」と呼ばれるものを明らかにしていくことで、さらに臨床対話の本質に迫りたい。

参考文献

- [1] 長岡千賀・桑原知子・渡部幹・吉川左紀子 2006 心理面接における話者理解に関する実証的検討(1)ーカウンセリング対話の時間構造の分析手法の提案ー 日本心理学会第70回大会発表論文集。
- [2] 渡部幹・桑原知子・長岡千賀・吉川左紀子 2006 心理面接における話者理解に関する実証的検討(2)ー模擬カウンセリングを用いた検討ー 日本心理学会第70回大会発表論文集。
- [3] 小森政嗣・前田恭兵・長岡千賀 (印刷中) ビデオ解析による身体動作同調傾向の定量化手法の提案-カウンセリングを題材として- 対人社会心理学研究. 7

遺伝情報と意思決定に関する臨床心理学的、社会心理学的、認知心理学的研究

メンバー：伊藤良子(教育学研究科 (臨床心理学))

楠見 孝(教育学研究科 (認知心理学))

<本課題の位置づけ>

遺伝医学の進歩により、ヒトゲノムの解明が進み、発症前や出産前に遺伝病のリスク診断もできるようになってきた。一方で、クライアントが直面する遺伝情報の受け入れの困難さや、遺伝子検査結果が判明した後の後悔・不安をいかに心理的に支援するかが重要な問題になっている(e.g. 伊藤, 2004; Lerman, et al, 2002; 駿地, 2004, 玉井, 2005)。我々は医師の遺伝カウンセリングに心理面接を導入した体制を作り上げてきたが、こうした支援を適切におこなうためには、遺伝意思決定の認知的・感情的な規定要因と情報や専門的な支援ニーズを明らかにする必要がある。

<本研究の目的>

本研究では、これまでの遺伝カウンセリングにおける心理臨床実践をふまえて、大学生が直面しうる時系列的な仮想場面(診断,結婚,出産)を設定し、意思決定の認知・感情過程とその規定因、決定スタイルの個人差と支援ニーズを体系的に明らかにした。あわせて、比喩生成法と連想法を用いて遺伝のイメージを多角的に検討した。

<研究方法など>

回答者 教育・心理系大学生 122(男 52,女 70)名。

質問項目 (a)遺伝知識項目 (8項目)：正しい内容を示し、5件法(1:知らなかった-5:知っていた)で評定させ、事前知識を与えた(例:病気の発症前の遺伝子診断とは、病気の原因遺伝子を受け継いでいるかどうかを診断するものである)。

(b)遺伝意思決定(ビニエツト法) (1)発症前遺伝子診断：以下の状況におかれている場合、(i)遺伝子検査を受けたいか、決定の困難度、決定における不安を7件法評定で求めた。つづいて、(ii)病気の遺伝子を持っている/いないと思うかの主観確率を割合で回答させた。(iii)遺伝子検査を受けたい理由(5項目：人生設計ができる、安心がしたいなど5項目)と受けたくない理由(わかっ

てしまうことが恐ろしい、発症不安に対処できないなど9項目)に対して、5件法(1:あてはまらない~5:あてはまる)で評定を求めた。

あなたは20歳です。あなたのお父さんは45歳である重い病気になりました。お兄さんも30歳でおなじ重い病気になり、現在治療を受けています。お兄さんは遺伝子診断を受け、結果は陽性であることがわかりました。あなたは現在健康な状態ですが、この検査を受けるかどうか決めようとしています(中略)。あなたに、ある重い病気になりやすい遺伝子が受け継がれている場合、60歳までにその病気になる確率が70%であるとします。あなたのお兄さんが遺伝子診断で陽性なので、あなたはその遺伝子を持っている確率は5割です。(以下略) (渡辺・甲斐・赤林, 2001を一部改変)。

(iv) 遺伝子検査結果が「発症する遺伝子を持っている」であった場合、検査を受けたことを後悔する程度を5件法で回答させた。

さらに、(2)恋人(婚約者)への伝達、(3)自分の子どもの出生前診断に関しても同様の評定を求めた。

(c)支援ニーズ 上記(1)-(3)の状況に直面した場合、誰に相談にのってほしいかを、専門家(病気、遺伝、心理)、家族、友人、同じ病気を持つ人について、5件法(1:のってほしくない-5:のってほしい)で評定を求めた。さらに、どのようなサポートがほしいかについて、病気、遺伝、体験談、心理的支え、理解してくれること、指示・助言・提案について5件法(1:ほしくない-5:ほしい)について評定を求めた。

(d)連想と比喻生成 「遺伝」で連想することばを5語、空欄に記入を求め、さらに、たとえることばを「遺伝とは()のようだ。なぜなら()だからだ」の形式で1つ記入を求めた。

(e)決定スタイル Radford & 中根(1991)の24項目(例:意思決定を避ける)を5件法(1:あてはまらない-5:あてはまる)で求めた。

<結果などについて>

遺伝知識 大学生は、遺伝の基礎知識について、「(だいたい)知っていた」と回答した比率を見ると、「父母両方からの遺伝子が子どもに受け継がれる」(63%)、「病気のかかりやすさの遺伝」(61%)に比べて、遺伝子診断に関する発症前診断(23%)や出生前診断(9%)について、知っていた者は少なかった。

遺伝子診断の受検希望 従来の研究と同様に受検希望の比率(「非常に」から「どちらかというを受けたい」の合計)は、発症前診断(79%)は高く、出生前診断(44%)では低下した。陽性結果を知っても後悔しない(70%)、恋人に陽性結果を伝える(74%)比率は高かった。

受検希望の規定要因 発症前診断希望と相関をみると、抑制要因は決定困難、怖ろしさ($r_s = -.56, -.24$)、促進要因は人生設計や子どものリスクへの対処($r_s = .38, .26$)であった。受検希望を目的変数として、重回帰分析をした結果、決定時の不安や理由の説明率が高く、重相関係数は $R = .67$ であった。

受検への後悔との相関を見ると、抑制要因は受検希望、人生設計($r_s = -.32, -.31$)、促進要因は決定時の困難や不安($r_s = .43, .42$)であった。後悔を目的変数として、重回帰分析をした結果、検査への消極性や不安・困難度の説明率が高く、重相関係数は $R = .66$ であった。

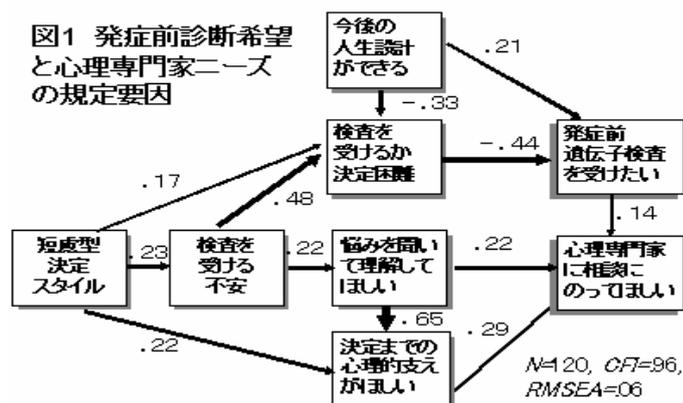
出生前診断希望との相関を見ると、抑制要因は自然にまかせるべき($r = -.23$)という考え方で、促進要因は中絶や子どもの早期治療($r_s = .35, .31$)であった。受検希望を目的変数として、重回帰分析をした結果、中絶、早期治療などのこれらの決定理由の説明率が高く、重相関係数は $R = .60$ であった。

図1の共分散構造分析の結果は以下の関係を示す。短慮型決定スタイルは決定不安や困難を起しやすい。検査への不安は、決定困難を導き、検査希望を抑制した。一方、「人生設計を立てたい」ということが遺伝子診断受診を促進していた。そして、検査への不安は、心理専門家に対して、「悩みを理解してほしい」「決定を支えてほしい」というニーズに結びついていた。

情報ニーズと支援の関係 情報を求める程度と相談相手の希望度合いの相関を調べたところ、病気情報は病気専門家($r = .63$)、遺伝情報は遺伝と心理専門家($r_s = .51, .39$)、同じ立場の人の情報や経験は同じ立場の人と心理専門家($r_s = .47, .34$)、心理的支えは家族と心理専門家($r_s = .46, .45$)、悩みの理解は家族と心理専門家($r_s = .53, .43$)、指示・助言・提案は心理と病気専門家($r_s = .29, .20$)との相関が高い。心理専門家への相談希望はさまざまなニーズとの相関が高かった。

遺伝の比喻 遺伝の比喻は4つに分類できた。第一は「運命、くじ等」(45例)で自らコントロールできない偶然的な事柄を表す。第二は、「絆、歴史等」(35例)であり、家族に受け継がれるものを示す。その他には数は少ないが「設計図」(5例)、「不可知なもの」(5例)があった。連想反応に

関しても同様の結果が得られた。



注意欠陥/多動性障害 (ADHD) に関する総合的研究

主要メンバー

- 船橋新太郎 大学院人間・環境学研究科・教授 (認知神経科学) (世話人)
 伊藤 良子 大学院教育学研究科・教授 (臨床心理学)
 角野 善宏 大学院教育学研究科・助教授 (臨床心理学)
 板倉 昭二 大学院文学研究科・助教授 (発達心理学)
 吉川左紀子 大学院教育学研究科・教授 (認知科学)

目的

注意欠陥/多動性障害(ADHD)が近年大きな社会問題になっている。日本では4%程度の児童がこの障害をもつと推定されている。ADHD児では、集中力の不足、衝動性、気分の易変性、落ち着きのなさ、協調運動の障害、無秩序性などの行動上の特徴を示し、このような行動上の問題により学習障害を生じること、周囲の児童に影響を与える結果、「学級崩壊」と表現される学級内での無秩序状態の生じることなどが多数報告されている。ADHDが社会問題として注目を浴びている反面、ADHDの克服策としては児童本人や家族に対するカンセリングが中心で、ADHDに関する基礎的研究はほとんど実施されていない。ADHDと診断された児童間に見られる障害の多様性、薬物に対する効果の多様性などから、ADHDが単一の要因により生じた障害であるとは考えられない。そこで、心理学的、臨床心理学的、神経科学的方法を組み合わせることにより、ADHDの行動学的な分類、各分類群の要因の解明をめざすと同時に、ADHDを克服するための方策の確立をめざす。

活動報告

昨年に引き続き、研究会を実施した。その内容が新設を計画している「京都大学こころの未来研究センター」の研究内容と重複していること、また、主要メンバーの中にこのセンターの設置に関わる者がいたことから、重複して活動を実施した。

第12回研究会 (第3回こころの未来フォーラム)

日時：平成18年9月3日 (日) 午前10時—午後5時

場所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール

テーマ：

『豊かなこころをとりもどす —注意のしくみとその障害の克服へのとりくみ—』

内容：

- 「注意とはどのようなものか」 齋木潤 (京都大学)
- 「注意をコントロールする神経メカニズム」 小川正 (京都大学)
- 「注意欠陥・多動性障害 (ADHD) とは？」 市川宏伸 (東京都立梅ヶ丘病院)
- 「ADHD：学校でのとりくみ」 小松晃子 (京都市教育委員会)
- 「ADHD：家庭・社会でのとりくみ」 内藤孝子 (全国LD親の会)
- 「ADHD：心理療法でのとりくみ」 伊藤良子 (京都大学)

企画と司会：船橋新太郎（京都大学）

第13回研究会（第3回こころの未来セミナー）

日時：平成18年10月6日（金） 午後5時より午後6時半まで

場所：京都大学総合人間学部棟1102講義室

話題提供者：松村京子（兵庫教育大学大学院学校教育研究科・教授）

「情動知能を育む教育 ー人間発達科の試みー」

第14回研究会（第5回こころの未来セミナー）

日時：平成18年12月6日（水） 午後3時より午後4時半まで

場所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟B23B講義室

話題提供者：津本忠治（理化学研究所脳科学総合研究センター）

「発達脳の可塑性とそのメカニズム」

第15回研究会（第6回こころの未来セミナー）

日時：平成19年1月23日（火） 午前10時半より正午まで

場所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟B23A講義室

話題提供者：岡田尊司（京都医療少年院・精神科医）

「子どもを取り巻く環境要因と複雑性発達障害」

成果報告

昨年度に引き続き、ADHD児の具体的な事例、どのような行動上の問題、認知機能に関する問題があるのかの検討に主眼をおくと同時に、そのような問題を解決するためには何が必要なのか、ADHD児自身が克服しなければならない事は何か、ADHD児をとりまく家族や社会は何をすべきなのかの検討、さらにADHDの生物学的な要因を検討する目的で、専門家による全日のフォーラムを開催するとともに、これに関連した3回の研究会を開催した。

一方、霊長類研究所との共同によるADHDの動物モデルに関する研究では、発達初期に前頭連合野で生じたドーパミン系の機能障害がADHDの生物学的要因であるという仮説を検証する目的で、生後約半年のコザルの両側前頭連合野背側部に6-OHDA（ドーパミンの神経支配を長期にわたって阻害する薬剤）を注入し、行動観察を実施した。行動観察は、実験室内に設置したテストケージ内での自発行動量を1分ごとに自動カウントすると同時に、ホームケージ内での自発行動量も同じ方法で計測し、6-OHDA注入群と非注入群との間で比較した。その結果、6-OHDA注入群で明らかな行動量の増加が、テストケージ内でも、ホームケージ内でも、観察された。自発行動量の増加傾向は長期にわたって観察されている。

メチルフェニデート（別名リタリン）がADHD児の行動改善に非常に有効であることはよく知られている。6-OHDA注入サル群の行動においても、ADHD児で見られるようなリタリンの効果が得られるかどうかを検討する目的で、ヒトに処方される場合と同じ量（1.0-4.0 mg/kg 体重）のリタリンを同じ方法（経口投与）で投与し、自発行動量を計測した。2.0 mg/kg以上の投与量で、投与約1時間後から自発行動量が低下し、このような傾向が3時間程度続くことが明らかになった。

このように、6-OHDA注入群で自発行動の増加が観察され、これがリタリンの投与で低下することが明らかになっている。次の目標は、注意障害がこの動物に観察されるかどうか、これがリタリン投与で改善されるかを明らかにすることである。

融合研究「質的心理学とアクションリサーチの方法論」研究成果報告書

メンバー：やまだようこ（リーダー）・杉万俊夫・藤田和生・子安増生・遠藤利彦

本融合研究は、下記の2つの観点から、心理学研究の新しい理論的・方法論的提案をすることを目的にして組織された。

1) 質的心理学の理論的研究（認識論の変革によるナラティブ的転換と新しい対話的方法論の構築をめざす心理学の理論的・方法的基礎）と、アクションリサーチ（人間・社会生活のベターメントをめざす実践的・現場介入的研究）の融合を試みる。

2) 発達心理学における生涯発達・進化的アプローチ（時間的変化プロセスへの関心）と、社会心理学における文化・社会的アプローチ（空間的多様性への関心）の有機的融合を試みる。

質的心理学とアクションリサーチは、心理学の新しい方法論を切り拓き、近年急速に発展し、

学際的にも国際的にも大きな注目を浴びている。両者は、^{フィールド}現場に関心を向ける点では共通している。しかし、理論的視座からみると、質的心理学は人が経験を主体的に意味づける意味の行為 (acts of meaning) に、アクションリサーチはベターメントに向けてのデシジョン・メイキング (decision-making) にウエートを置いてきた。方法論的視座からみると、質的心理学はフィールドの多様な相互行為プロセスや当事者の経験を入れた記述をめざし、アクションリサーチは^{フィールド}現場を実践的に変革する方略を求めてきた。

質的心理学とアクションリサーチ、両者の理論的連関を明確にし、機能的融合を促進し、両者を融合した方法論的展望と新しい手法の可能性を開拓するために、「パーティシペーション」「ナラティヴ」「アクション」という3つのキーワードを基に、下記に示すように3つの観点から研究した。その研究成果は、心理学評論 (2006) の特集「質的心理学とアクションリサーチ ―パーティシペーション、ナラティヴ、フィールド共同実践の融合的視点」として刊行された。

また、融合研究の国際的情報発信活動として、A チームと協力して、2006年10月25日～26日にイギリスのランカスター大学で国際シンポジウムを開催した (49 ページ参照)。このうち、融合研究に関わる話題提供者および発表題目は以下の通りであった。

Shoji Itakura: Do infants prefer possible human movements?

Yohko Shimada: Infant sound production as a playing behavior

Ikuko Shinohara: Maternal mental attribution to infants: Its effect on 18-month-olds' skills of joint attention

Ayako Ogawa: The role of executive function in Japanese children's false belief understanding

Masuo Koyasu: Young children's development of understanding others' mind: From perspective-taking to theory of mind

<第1部会 パーティシペーション ―^{フィールド}現場に参入して心を知る>

心理学は、物理学や化学のような物質科学とは異なり、対象に接することによって、予期するとせざるとにかかわらず、対象の行動や心理が変わり、また研究者自身の行動や心理も変化するという契機を常に孕むものである。あらゆる学問の基本とされる観察は、基本的には「見る」ことであるが、観察の対象者 (人間またはその他の動物) は、研究者から「見られている」ことに気づいたとたん、その行動や心理が変化する。この状況を最もよく説明することばはパーティシペーション (participation) であり、「参加」「関与」「分有」などの訳があてられている。研究者は、対象者について研究を行おうとするとき、ほとんどの場合、好むと好まざるとに関わらず、自らを非可視的な「透明の存在」にしておくわけにはいかない。パーティシペーションとは、研究者が自らの存在や、存在すること自体がもたらす潜在のおよび顕在的影響力を自覚し、またそのことをある意味で逆手にとって、対象者と関わりながら研究を行うことを言うものである。このパーティシペーションが、対象者の生活や対象者をとりまく環境の改善を目標とする場合には、アクションリサーチにつながるものである。第1部会では、ヒト以外の諸動物、子どもといった対象者の研究におけるパーティシペーションの意味を以下の3つの観点から考察した。

1-1 比較認知科学におけるパーティシペーションの意味 (藤田和生・京都大学文学研究科)
(コメント: 長谷川寿一・東京大学)

1-2 ゴリラの人付け、人のゴリラ付け (山極寿一・京都大学理学研究科)
(コメント: 中道正之・大阪大学)

1-3 幼児教育の現場におけるパーティシペーション (子安増生・京都大学教育学研究科)
(コメント: 内田伸子・お茶の水女子大学)

厳密な実験室的・訓練的手法は、比較認知科学において大きな成果を挙げてきたが、近年飛躍的に進歩した社会的知性の研究においては、実験者が積極的に動物とインタラクションする1種のパーティシペーション的手法が重要な意味を持っている。

1-1では、この手法による成果の一端を紹介しつつ、その限界や将来への課題について論じた。また、大学院生の堤清香と共同で、中米ニカラグアに棲むホエザル、カメルーンのオオハナジログエノン、及びゴリラを対象に、パーティシペーション実験を用いてヒトの注意状態の認識

を比較している。これらの種は霊長類中での系統発生的位置と採食生態が異なるとともに、生息地により、ヒトとの関係が敵対的、中立的、あるいは協力的である。ヒトとの関係が中立的なホエザルの予備的分析では、サルを見つめるという同じ動作が、銃を持つなどの一時的な脅威によって異なる効果をもたらすことがわかった。つまりヒトの同じ動作が文脈によって異なる意味を持つことをサルは認識していることが示された。

1-2では、霊長類の野外研究の立場から、以下のことが論じられた。野生霊長類を人間の観察者に馴らして調査する方法を人付けというが、ゴリラの場合は人間がゴリラの行動のルールを守って群れに受け入れてもらうことからゴリラ付けという。類人猿に特徴的な調査方法で、観察者は類人猿と直接コミュニケーションを体験することで彼らの行動や社会についてのヒントを得ることができる。しかし、それが擬人主義に陥らないために、長期の観察によって事例を集め、実験室の心理学者と緊密な協力を結んで、仮説を慎重に検討する必要がある。

1-3では、科学における「観察の客観性」の問題について議論した後、子安・服部・郷式(2000a, b)から幼稚園での幼児の活動の日常観察のエピソード2つを事例として取り上げ、エピソードの記述にはナラティブとしての要素が不可欠かつ不可避であること、観察者がとるべきアクションがいかにあるべきかについて、戦場ジャーナリズムのメタファーからパーティシペーションの意味について考察した。

<第2部会 ナラティブ ^{フィールド}ー現場の経験を語りから質的にとらえる>

心理学に限らず多くの学問分野において、質的方法が大きな注目をあび、新しい学会の成立が相次いでいるのは、根底からもの見方をとらえ直し、人間科学を見直そうという広く深い理由がある。

科学の基本において、数量化も質的記述も両方とも科学の方法論として重要なことは自明である。質的心理学とは、単に数量化になる前の未熟なデータ、定性的データを扱う研究のことを言うのではない。

質的心理学の核には、「ナラティブ・ターン」(物語的転回)や「ナラティブ・モード」と呼ばれる、人間の経験世界をとらえる基本的認識論と、その世界に切り込む方法論と、それによって特にクローズ・アップされてくる問題群がある。そこでナラティブに焦点をしばって、その理論的な意味と、そこから見えてくる新しい研究の景観を見通し、実践的な方法論の提案を試みる。

ナラティブ(語り・物語)は、語り手と聞き手の関係性によって生成される語り行為と語られた物語をさす。したがって、ナラティブ研究をする上において、語り手あるいは聞き手として

^{フィールド}現場にどのようにパーティシペイトするかは本質的な問いとなる。

ナラティブは、テキストとコンテキスト(文脈)という概念と深くむすびついている。生涯発達心理学は、時間軸にそって心理過程の変化プロセスを扱う学問であるが、ライフストーリー(ライフ・ナラティブ)で扱われる生涯や人生は、いつ、どこで、誰がみても同じ抽象的な時間が扱われるのではなく、社会・文化・歴史的な文脈と不可分にむすびついて、出来事をどのように経験し組織するかという観点から時間が扱われる。ナラティブとは、別のことばでいえば、「経験の組織化のしかた」であるが、それが埋め込まれている文化・社会・歴史的な文脈を同時に視野に入れることによって、社会心理学や文化心理学において扱われてきた問題領域と越境しあう関係になった。また、ナラティブは、物語や語り方を変えることで、経験の組織化を変革するという概念を含んでいるので、アクションリサーチとも限りなく接近するのである。

2-1 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念 —ナラティブ・ターンと物語的自己(やまだようこ・京都大学教育学研究科)(コメント:南博文・九州大学)

2-2 語りにおける自己と他者、そして時間 —アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質 (遠藤利彦・京都大学教育学研究科)(コメント:野村晴夫・北海道教育大学)

2-3 “人生被害”はいかに聴き取られたか?—ナラティブ実践としてのハンセン病賠償訴訟における弁護士の聴き取りプロセス (徳田治子・九州女子短期大学)(コメント:能智正博・東京大学)

2-1では、質的心理学とは何か、それは、古典的な定性的研究や個性記述的研究とは、どのように異なるのかを明確にし、言語論的転回のと、1990年ころからのナラティブ・ターンを中

心に、質的心理学が拠って立つ基礎概念を整理した。また、ナラティブ・アプローチによって、心理学の研究内容と方法がどのように変化するかを、特に物語的自己、ナラティブ・アイデンティティをもとに論じた。

2-2では、個が自らを語るふるまいの中に、自己と他者はいかに潜み、またそれは過去、現在、未来という時間軸上にいかに位置づけられ得るかについて心理学的な考究を行った。特にこれまでの語り研究を俯瞰し、そこに、自己と他者、そして時間に関わる、いかなる暗黙の前提が潜むのかを審らかにし、その妥当性を問う試みをなした。

2-3では、ハンセン病国賠訴訟における弁護士の被害聴き取りのプロセスをナラティブ実践の事例として読み込み、“人生被害”とも称された甚大な被害の歴史が弁護士によってどのように聴き取られ、また、それらのプロセスが原告となったハンセン病元患者・回復者たちの自己の捉え直しや被害回復に向けた一歩を踏み出す上でどのような役割を担ったかについて考察した。

<第3部会 アクションリサーチ ^{フィールド} — 現場の当事者と共同実践を展開する >

当事者と研究者の協同的实践によって現場のベターメントを意図するアクションリサーチによって、質的心理学の方法 --- エスノグラフィー、インタビュー、ナラティブ、ディスコース等の記述・分析 --- は、量的方法と並んで極めて重要である。これらの方法は、アクションリサーチの一次モード（現場の過去・現在・未来を把握し、目的志向的に現場のベターメントに取り組むモード）を深化させるとともに、二次モード（一次モードの「気づかざる前提」が相対化され、次なる一次モードの下地が準備されるモード）への進展可能性を拡大する。

3-1 語りとアクションリサーチ — 防災ゲームをめぐって（矢守克也・京都大学防災研究所）（コメント：茂呂雄二・筑波大学）

3-2 アクションリサーチにおける質的心理学の方法によるセンスメイキング — 町村合併で翻弄された過疎地域活性化運動の再定位（東村知子・奈良女子大学）（コメント：作道信介・弘前大学）

3-3 質的方法の先鋭化とアクションリサーチ（杉万俊夫・京都大学人間・環境学研究科）（コメント：浜田寿美夫・奈良女子大学）

アクションリサーチに軸足を置く立場から、現場の当事者と研究者の協同的实践における質的心理学的方法論的役割について、実践と理論の両方から検討を加えた。

3-1では、防災実践の現場で、過去に災害を体験した当事者と、将来の災害に備えようとする当事者とを、それぞれの防災実践についての語りを促すツール（集団ゲーム）を研究者が準備することによって、連携させようとしたアクションリサーチを実施した。

3-2では、20年来、全国的に見ても先駆的な活性化運動が展開され、ここ3年間、町村合併で翻弄された過疎地域（鳥取県智頭町）において、合併派・単独派によって発行された大量のチラシを言説分析の手法で分析し、町を二分した「混乱」（3回の住民投票ではいずれも僅差で合併が支持されつつも、最終的には町議会の合併拒否の議決によって単独路線を歩むに至った3年間に及ぶ混乱）のセンスメイキングに資するという試みを行った。その結果、両陣営が必ずしも合併・単独という表看板で単純に衝突していたわけではなく、それぞれに町のことを「自分たちで決める」ために戦っていたこと、その意味では双方にとって苦い結果に終わった論争が、それでもなお積極的な意味を持ちうる——町の規範を確実に変化させた——ことを示した。

3-3では、アクションリサーチの質的レベルアップを促す質的心理学方法の先鋭化に関して、最近の欧米における研究動向をも踏まえて、理論的に考察した。具体的には、エスノグラフィー、インタビュー、ナラティブ・アプローチ、言説分析という4つの質的方法を取り上げ、それらをフーコーの権力作用の可視化、および、研究者と研究協力者の自覚的協同作業という観点から、いかに先鋭化しうるかを提言した。

他者の信頼性情報に関する脳イメージング研究

渡部 幹・山本洋紀（人間・環境学研究科）

近年の社会科学において信頼は、民主的組織や制度の運営に欠かせない要素として注目を浴びている（Putnam 1993, Fukuyama 1995）。信頼自体は心理学の分野でも、研究対象となっていたが、この社会科学における信頼研究が重要視しているのは、既存の関係をより深めるという信

頼の役割よりも、見知らぬ他者と新たな関係を結ぶという「信頼の関係構築機能」である。この機能に注目した研究の代表的なものには、山岸(1998)などがあり、それらの研究の多くは、行動指標を用いた実証的なアプローチを採った上で、信頼には見知らぬ他者との関係構築機能が存在することを証明することを目的としている。

これに対して本研究では、近年盛んに行われている脳イメージング法を用いた他者の信頼性判断の際の脳賦活を測定することにより、関係構築の際の人々の意思決定メカニズムに関する生理学的な知見を得ることを目的とする。具体的には、初対面の相手に関する情報を得たとき、信頼できるか否かを判断する際に活性化する部位を特定し、それがデフォルトとして一般的他者に持っている信頼（一般的信頼）とどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。

他者を信頼できるか否か判断に関する脳イメージング研究にはいくつかあるが、もっともこの研究とパラダイムが近いのは Delgado ら(2005)の研究である。彼らは見知らぬ相手と一度限りの信頼ゲームを行ったときの意思決定時の脳活動を調べている。しかし、彼らの研究は実際にゲームを行い、相手からの即座のフィードバックもある場合における意思決定を扱っているのに対して、この研究では相手の情報のみを被験者に与えているだけであり、純粋に相手の情報による信頼性判断を調べる上でより妥当な実験である。さらに、Delgado ら(2005)は抽象的なゲーム実験場面であるのに対し、本研究で被験者に与える情報は日常場面での行動であり、よりエコロジカルな妥当性を持つものである。

以上の相違を踏まえた上で、本研究での知見と Delgado らの知見を比較分析して、今後の方向性を定めることも本実験の副次的な目的である。

方法

昨年度行った大学生 112 名を対象にした予備調査から作成した「信頼性情報」と「無関連情報」の項目群を用いて、実験を行った。実験には 23 名が参加した。実験参加者は、事前に信頼尺度（山岸 1998）に回答することによって、信頼パーソナリティ得点を測定されていた。実験実施施設に到着した参加者は、実験に関する注意と説明を受けた後、MRI 装置の中に入り、装置内のプロジェクターに映し出される質問に対し、押しボタンスイッチを用いて応答した。参加者は「ある人物についての情報」として、信頼性情報もしくは無関連情報を提示される。情報は、ランダムな順序で、信頼・無関連 16 個ずつの計 32 個が提示される。そして、そのそれぞれの情報について、その人物が信頼できるかどうか、判断を下すよう求められた。判断は、「信頼できる」、「信頼できない」、「判断できない」の三択でなされた。情報の提示時間は 5 秒間であり、2.5 秒間のインターバルを置いて次の情報が提示された。参加者は、できるだけ早く、かつ正確な判断を行うよう指示された。

結果と考察

23 名の実験参加者のうち、うち 2 名は実験中に眠ってしまったため、分析から除外し、21 名を分析対象とした。参加者の信頼パーソナリティ得点はおおむね中程度に固まっていた ($M=4.22$, $SD=1.01$ 。「信頼できない」～「どちらでもない」～「信頼できる」という 7 点尺度が用いられ、得点が高いほど信頼パーソナリティが高いことを意味する)。

信頼性情報に対して賦活する脳部位を同定するために、実験参加者が信頼性情報に対して応答している場合と、無関連情報に対して応答している場合とで、脳活性パターンを比較した。昨年度の実験では、この点に関して詳細な検討ができなかったが、今年度はローデータを吟味し、ノイズを最小限に抑えるための処理を施した上で再度詳細な分析を行っている。

なお、信頼性情報を提示された場合は、88%が「信頼できない」という押しボタンでの応答を示し、無関連情報を提示された場合は 82%が「判断できない」と応答しており、予備実験より作成した情報リストの妥当性は本実験においても高いことが確認されている。

判断にかかる時間（情報が提示されてから押しボタンを押すまでの時間）には著しいばらつきがあり ($M=3042$ ms, $SD=1514$ ms)、取り出して分析するのは困難であるため、情報が提示されてからの 6 秒間を、情報に対する応答時間として分析上定義し、応答時間における脳活性を BrainVoyager QX を用いて、信頼性情報と無関連情報で比較した。

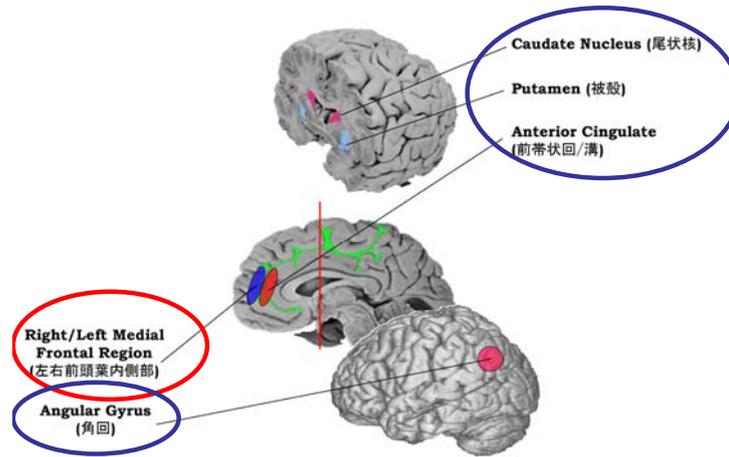


図1: 賦活した主な領域

図1に賦活した領域を示す。これらの領域の多く、特に左右前頭葉内側部や前帯状回／溝は、これまでも社会的な意思決定の際に賦活することが多くの研究で報告されており、これらの知見と一貫した結果を得ている。重要なのは、Delgadoら(2005)が示した賦活部位と本研究で見出したこれらの部位はすべてオーバーラップしている点である。すなわち、実験室における抽象的なゲーム実験と現実場面での判断での賦活部位が同じことは、実験ゲーム研究で調べられた意思決定メカニズムが生態学的妥当性を持つ可能性が高いことを示すものである。従来、実験ゲーム研究の生態学的妥当性に関しては疑問が提示されてきたが、この知見はその疑問に対する答えのひとつとなる。

さらに、被験者の信頼パーソナリティスコアを高・中・低の三段階に分け、上記5部位の活性化度合いを段階ごとに記したところ、図2のようになった。被験者数が少ないため、統計的検定で有意な結果は得られていないが、どの部位に関しても、中信頼の活性が最も高いことが示されている。これまでの認知心理学的な知見(小杉・山岸 1996, 林・与謝野 2005)では、高信頼者が信頼情報に最も敏感であるという知見や、低信頼者の方が敏感であるという知見など、いくつかの知見が報告されているが、この結果はいままでどのいずれとも異なるものである。さらに、低信頼群と高信頼群のみの比較では、左右前頭葉内側部のみ高信頼者の賦活が高いのに対し、他の部位では低信頼の賦活が高い。これも有意ではないものの検討に値する知見と考える。今後被験者数を増やした上で更なる検討を行いたい。

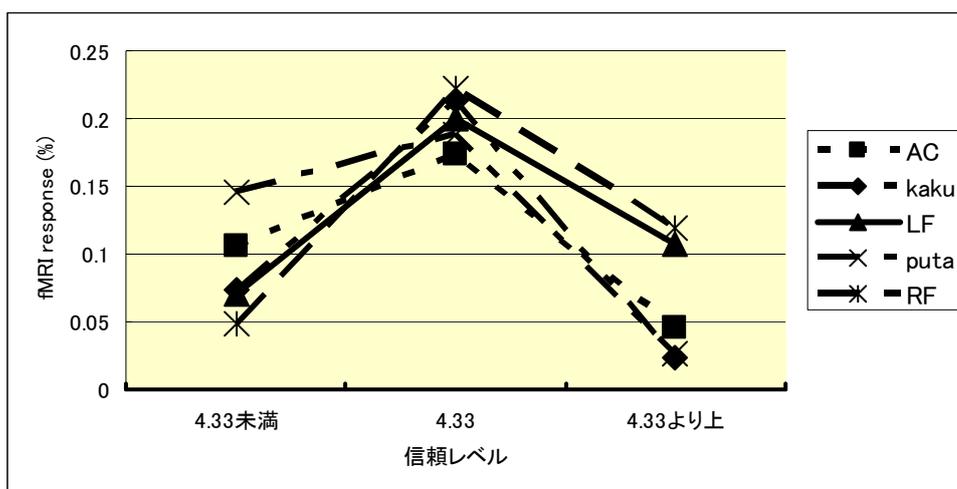


図2 : 信頼レベルによる5部位の活性化度合い (Puta : 被殻、LF : 左前頭葉内側、RF : 右前頭葉内側、AC : 前帯状回／溝、kaku : 核回)